

---

**f l y h i g h**

冴河冴

---

P D F 小説ネット  
Byウメ研究所  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

fly high

### 【コード】

N0311E

### 【作者名】

冴河冴

### 【あらすじ】

十三歳。生まれないほうがよかったと思いながら、明日を思い悩んでいる。明日も生きていられるかな？絶望せずにいられるかな？（改定したので、一度ご覧になった方も、お時間ありましたらどうぞ）

fly high

俺たちは必死だった。いつだってめいっぱい生きていた。国は違っけど、俺たちはきつと分かり合えるっと思う。

十三年しか生きてないけど、ちゃんと平和を考えられるさ  
十三年しか生きてないけど、その辺の子供よりはより生きる術を知ってるさ。生きたいっと思うてるさ

頼れる人なんかいなかった。愛してくれる人はいなかった。信じられるのも自分と仲間だけだった。

憶えてるか？

明日殺されるかもしれない、明日死ぬかもしれない。  
だから、だけど、生きたいって、生き延びてやるっと思うた。

向かい風の中俺たちは

「fly high!」

fly high

fly high

日本 中学生（前書き）

思いつきり自分の話だあ（笑）

## 日本 中学生

「起きろ！一体何時だと思ってるんだ！」

私はたたき起こされた。そして条件反射で謝った。

「ごめんなさい」

そう言いつつ時計を見ると、今は7:00だった。私は布団をベランダにもって行き、干した。向こうで父親が兄をたたき起こしているのが聞こえた。今日は日曜日だ。

私はキッチンに立って手を洗い、朝食を作り始めた。母親はなにやら慌しくしている。

「ねえ、7:30に家でなきゃいけないんだけど！間に合わないじゃない！」

そういうことは昨日のうちに言っておいてほしい。私は聞こえなかった振りをした。

15分程で朝食ができた。サラダにバナナジュース、パンにゆで卵、ヨーグルトだ。普通のところじゃもっと豪華なのを出すのかもしれないが、普通がなんだか、私にはよくわからない。

「いただきます」

父親は会社での新人の失態を愚痴っている。最後はお決まりの、お前たちは楽しいいな、だった。放っておくとキレるから、私は適当に相槌を打った。

母親はチラチラ父親を睨みながら朝食を食べている。

私は目を伏せた。そんな雰囲気の漂うこの家が、昔から大嫌いだった。そんなにいらいらするくらいなら離婚すればいいのに。

「今日大学のガイダンスがあるから、行ってきなさい」私は母親の声に、顔を上げた。もっと早く言えという言葉は飲み込んだ。

「今日は宿題があるし、明日は部活だし」「行きなさい。立川だから。」

言葉のキャッチボールというよりはドッチボールに近い。母親はそれだけ言つと立ち上がり、家を出た。

どこに行くのも勝手だが、帰る時間位は言つてくれないと夕飯の支度ができないのだけれど。

母親が残していった食器を運んで洗い、私は仕方なく大学のガイダンスに向かった。中一がそんなところに行つても浮いてしまうだけだと思つが。

\*

私は特に行きたい大学はなくて、ぶつちやけ高校にも行く気はない。

というか、できるだけ早く家を出たいから、中学出たら就職する気なのだ。できることなら小説で生計を立てたい。そんな私でも、中卒で就職できるところなんてそうそう無いのは、流石にネットで調べる前からわかつていた。

案の定出てきたのは、中卒不可、高卒不可の嵐。学歴が無くても給料がそれなりにもらえるところは、生本番、ゴムなしの水商売の類だけだった。

家を出られるならそれでも構わないのだけれど。

もっともこれは友達にも知り合いにも、勿論親にも話していない。

電車がゆつくりと立川駅に着いた。

夜になればチンピラとヤクザであふれかえる道も、今は学生が部活に行くのか歩いているだけだ。

都市は、そこにいる人によって様々な顔を見せる。

安全だなんていつている奴は、昼の顔しか知らないだけだ。冷たい風が頬にしみた。

私は塾を目指して歩いた。そこで現役大学生のチューター達が、

ガイダンスを行っているらしい。地図を頼りに辿り着いたそこは、やたら大きい六階建てくらいビルだった。

中にはいると、既に高校生くらいの人と大学生達でこった返していた。受付でアンケート用紙をもらい、405教室に向かった。大学選びの基準についてをぼんやりと聞きながら、今日の夕食を何にするか考えていた。

いつの間にか説明は終わり、ついでに今日の献立も決まった。配られたアンケート用紙に適当にマルをつけて提出し、私は教室から出た。プログラムによると次のガイダンスはいくつかあって、文学・語学について、理工学について、教育学について、法・政治学についてなどだった。興味は無いけれど家に帰ったら何をしたのか聞かれるのだから、一つぐらいは話を聞いていかないとまずいだろう。適当に、目に付いた教育学についての教室に向かった。時計を見るとあと二分で始まることがわかり、一番後ろの端の席について、始まるまでの間本を読んだ。

\*

話は終わった。

「そろそろ出ようかな……」私はそう一人ごちた。取り敢えず話を聞いたということに嘘は無いし、まっすぐに帰らずに図書館にでも行けばいいだろう。

ただどなぜか私は個別相談室の前に立っていた。

このとき私は高校に……もしかしたら、大学にも……行きたかったのかもしれない。今となってはそんなこと、どっちでもいいことなのかもしれないけれど。

中はいくつかの机と資料の山があり、机と机の間には仕切りがあった。私は突然声をかけられた。

「相談に来たの？」

条件反射で頷いてしまったことを後悔しつつ見ると、その人は二十歳くらいの茶髪の人だった。遅しいより華奢に近い体躯。スポーツはやっていないだろう。

「こつち座って」

「…はい」

「…なんてアホやってんだよ、自分。」

話し出したのはその人だった。

「えっと…今高二、かな？」

「いや、中一です」

「なのに大学のこと考えてるの!？」

「いや、親が行けと。」

「あー。」

その人はそういいながらにやりと笑い、続けた。

「…ぶつちやけ、行く気ない」

「なんでわかったんですかっ」

「今自爆したよね。 ……俺も、そうだから。」

「え……………」

「俺、なんとなく高校行ってやることなくて大学行って。親嫌いだから一人暮らしして。君もそう思ってるんでしょ？」

ばれている。ばれ過ぎている。ちよつと考えてから、私は開き直ることにした。

「ええ。悪いですか」

「……なんでか、話す気ない？」

家族のこと、学校のこと、友達のこと、家を出て行きたいこと。私がそんな初対面の人に全て話してしまったのは、耐えられなかっただけではなかったと思う。ひよつとしたら自分と似ていると本能的に思ったからかもしれない。

\*

その人は、私の話しを聞いた後、自分の話をしてくれた。

自分は浪人していたから、親に煙たがられていること。兄が引きこもりで、家庭内がギクシャクしていること。父親は高慢で、兄を許さないこと。母親はそれを見て見ぬふりをしていること。そして、将来への不安。

無理に笑って話していたけれど、それは笑っていられる話ではなかった。

そしてその人は、俺にもわかるよ、と言った。その人は一呼吸置いて、また私に尋ねてきた。

「まずは、どうしたいの？」

「生計を立てたいです」

「現実的だね……その次は？」

「アパートを、借りたいです」

「そのあとは？」

「特に無いですね」

「お嫁さんになりたいとか、子供作りたいとか、無いの？」

「はい。」

私はちよつと笑いながら答えた。誰の話だ、それは。

「将来の夢とか、叶える気は？」

「それはもう仕方ないでしょう」「ほしい物があるなら、それなりの犠牲が必要なのだ。」

その人は、少し躊躇うそぶりを見せた後、私に優しく言った。

「そっか……ただね、俺は高校に入ったほうがいいと思うよ。すつげえ楽しかったから」

私は、答えない。

「じゃあさ、高校がすつごい楽しいところだと仮定してみて。それで、家を出られるけど高校に行けないのと、家は出られないけど高校行けると、どっちがいい？」

「……高校は、いいです」

働きながらちゃんといける高校なんて無いだろう。

「俺はそこまでは思ってたな……今はもう、親のこと、許してるし。」

「……どうやって」

「いや、可哀想だなあって、思ったんだ。そんな器ちっちゃくて。」

「……」

「完全にできてるわけじゃないんだけどね」

「……そこまですごい人には、なれないですよ」

「すごいってわけじゃないよ。でも、時間かければできると思う」

「そうですか」

「うん」

私は時計を見て、もう二時間近く経っていたことに気付いた

「うそ！ごめんなさい、こんなに遅くまで！」

「いいよ、別に。もう、大丈夫？」

私は黙ってうなずいた。

「じゃあ気をつけて帰りなよ？」

「はい、あの、ありがとございました」

そう言ったらその人は、ちよつと笑った。そして私は塾をあとにした。

よく考えれば、会う人全員を傷つけているのは自分で、なのにも拘らず変わっていないのは自分の責任だ。

そんな最低人間が、家を出たいと言っているのはおかしいことだし、それはまともに人生生きて最善尽くして、なのに酷い目に遭っている人しか言うべきでないセリフだ。

自分で自分が嫌になってきた。

これまで自己嫌悪に陥ったりしたとき、自分の過ちをわかっているつもりだった。けどもうそんなことは言えない。全部間違っているのが自分で、全ての責任が自分にあると気付いてしまった今、も

うそんなことは言えない。気付かずに、気付こうともせずに行った罪を、私は忘れていた。

町の喧騒に一步足を踏み出した。

今ここにいるのは、不良学生とチンピラの端くれだ。

都市が姿を変えつつあった。

「変わりてえよ……」

高校行って、大学進んで、誰も傷つけないで、一人でいられるくらい強くなって、そして憎むことをやめたかった。溢れ出した涙を下を向いて隠した。

生まれてきちゃって、ごめんなさい

誰にともなくつぶやいた言葉が外にふれた途端、妙に苦しくなった。死んで償うべきか、生きて罰を受けるか、どちらが正しいのかわからなかった。

## ウガンダ 少年兵

『奴らが来た、逃げる!』

『お兄ちゃん、どこにいるの?怖いよ!』

『いやーっ!』

『どけよ、邪魔だっつってんだろ!』

『痛いよ、誰か…助けて』

『お父さん、お父さんっ!』

『うあああーっつ!?!』

悲鳴と銃声がこだまする中、僕は母さんと姉ちゃんと、息を殺して家の中で隠れるだけだった。

ベッドの下に僕と姉ちゃん、キッチンの暗がりにも母さん。ここに隠れていたって見つかってしまいかもしれない。でももう逃げられる場所なんか無かった。

怖い。

いつドアが開くかわからない。いつ銃を向けられるかわからない。いつ殺されるかわからない。それが僕らの日常だった。

この辺り一帯の家は木造で脆いから、壁を貫通した流れ弾に命を奪われてもおかしくない。

「姉ちゃん…」

「しっ」

僕は姉ちゃんに話しかけたが、刹那、がん、どす、というドアが外れた音にふさがれた。

息をのみ、僕は必死に気配を消した。汗ばんだ姉ちゃんの手をしっかりと握った。汗が背中を伝っていった。心臓が、痛いほど脈を刻んだ。握り返す震えるその手だけが、僕と姉ちゃんを繋いでいた。

差し込んだ光が、地面に銃を持った人影たちを映した。足音がいやに大きく聞こえた。……男だ。そいつらはキッチンのほうに入っ

ていった。

『あ……』 声を出しかけた僕の口を、またすぐに姉ちゃんが塞いだ。  
向こうで何かが動いた。

『いやあっ』 母さんの声がした。

『黙れババア！ 子供はいるか！』

『い、いません』 首根っこを掴まれているのか、その声はこもっていた。どすっ、という鈍い音の後、呻き声がした。姉ちゃんの顔がゆがんだ。

『いるんだな。 吐け！』

『だからいま……』

さっきよりも大きい音がした。刹那、<sup>せしな</sup> 嗚咽と嘔吐しているようなくぐもった声がした。

本当は探したほうが早いのだ。 けどどいたぶって怖がらせて陵辱して、それを眺めるのだ。 この国で安全なところなんか無い。 少なくとも、僕の周りには。 僕らの行けるところには。

僕は唇を噛んで嗚咽を堪えた。 今ここで声を出したら、母さんが耐えてくれた意味がなくなってしまう。 少なくとも、この手で潰すことはしたくなかった。

しばらく、蹴ったり殴ったりするような音と声が聞こえた。

僕らは搾取される側だ。

ただ暴力に身を委ねないことがその理由。

世界はただただ理不尽で、平和なんてほざけるのはテレビの向こう側だけの話。

『そのへんでいい』

別の声がそう言うと、彼らは僕らを探し始めた。

ごそごそと右側で音がした。 嗚咽はまだ聞こえている。 僕と姉ち

やんは身を縮めた。音が近づいてくる。足音が、すぐ前で止まる。がばっ、とシーツが捲られた。

『出て手を上げる!』

姉ちゃんは泣きそうな顔をしながら這い出した。静かに僕も後に続いた。

『こい』男の一人が、銃を向けたまま姉ちゃんに言った。姉ちゃんは腕を掴まれ、無抵抗で外に連れて行かれた。

僕は別の男にナイフを渡された。僕は後退り、同時にいぶかしんだ。

『これで、母親を殺せ。』

『!いやだっ!』

『お前が母親を殺すか、俺がお前と母親を殺すかだ。』

『いやだあっ』

『どうせ母親は死ぬんだ。だが抵抗しなければお前は殺さない。お前は生きていだろ?』

『っ……!』

『これで母親を殺せ』

男の目は、闇に包まれて見えなかった。僕に選択肢は無かった。

だから静かにキッチンに向かって歩いた。鳥肌が立つ。

そこは母さんの吐瀉物で酷いにおいだった。そしてその真ん中に、話すこともままならない母さんが倒れていた。

目は合わせないようにした。見なくても怯えているのが、悲しんでいるのがわかる。

『う……そ……い、や……』

『うあああああああ……』

全体重をかけてナイフを振り被り、母さんの腹に突き刺した。肉の手心えがした。手に伝わる熱で、鮮血が溢れているのがわかった。



ちゃんが結局慰安婦になることに変わりは無かった。不可抗力だったんだ。

そう思わなければ、死んでしまっただった。

罪悪感で、人は殺せる。人はそれほどに脆く、それほどに罪深い。

男が叫ぶ。

「訓戒を唱えろ！」声に従い、僕らも叫ぶ。

「戦いは勝利するためのもの！戦死は名誉である！最前線で戦えることに、僕らは感謝すべきである！」

「明日には地雷圏まで進む。お前ら、先頭に立て。それからお前は、荷物を運べ。わかったか！」

「イエッサー」

「朝食だ。一人ひとつ。」

差し出された袋に、皆が群がった。今日の朝食は、ぱさぱさのパンひとかけらだ。少ないけれど、出ない日に比べれば今日はまだいい。

貪るようにそれを食べてから、僕は荷物を担いだ。何日も水を飲んでいなくて、飲み下すたびに喉が痛んだ。

指定された荷物を背負うと、ひどく重かった。六十キロくらいだろうか、肩に紐が食い込んだ。足がふらついたが踏ん張った。倒れたり怪我をしたりしたら殺されてしまうのだ。僕らの役目である、地雷圏で前を歩くということ、人間地雷除去器になるということだ。自分の身体で地雷を爆破し危険を消し、代わりに手足を失う。そして手足を失うと殺される。怖くないといえば嘘になる。でも死ぬほうがもっと怖い。

僕らの代わりはいくらでもいるのだそう。そうやって死ぬことこそ名誉なのだそう。

それを思い出して、僅かに胸に痛みが走ったけれど、それがなぜかはわからなかった。

僕は立ち上がって向こうを見た。どこまでも砂漠が続くばかりだ。オアシスなんて無い。奇跡だっておきない。戦争はなくならないし、誰にも頼ることはできない。夢を見ても意味はないし、腹いっぱいになんかなりはしない。泣いても母さんは返ってこないし、喚いても姉ちゃんも望まない妊娠をし続けるだろう。

その事實は、どうあがいても変わりはないのだ。

うだるような暑さの中、砂に足をとられながら前に進んだ。何度も転びそうになりながら、僕らはただただ前に進んだ。

わかつてはいたけれど辛かった。泣きそうになったけれど、水がないから泣くことはなかった。

戦争が正しいと言う大人たち。それに従うしかない子供たち。それを進めているのは、紛れもなく人間の欲望と醜情。正しいかどうかなんてわからないけど、僕はもう戦いたくなかった。もう戦ってほしくなかった。

僕は家族で暮らしたいだけだった。明日食べるものがあるだろうかとか、殺されはしないだろうかと心配したくなかった。僕は辛かった。死にたくて生きていたくて訳がわからなかった。

そしてこんな状態なのに、罪を忘れようと思ってしまうのが苦しかった。

これは、この生活は、僕が母さんを殺したことの、僕が姉さんを守るうとしなかったことの。僕が父さんを忘れたことの、罰なのかもしれない。

戦争が無ければ罪を犯さずに済んだかもしれないけれど、それはわからなかった。

僕らは地雷圏の先の戦場を目指し、歩き続けていた。遠く銃声が聞こえたけれど、僕らは歩みを止めることは許されない。

## ロシア ストリートチルドレン

寒い。

俺は寒気を感じて目を覚ました。いつの間にか、寄りかかっていた下水道管から身体がずれていたようだ。温水が流れる下水道管は、思いのほか暖かいのだ。その所為で鼠とゴキブリがうようよいるけれど。まあ、ここもあまり居心地がいいとは言えなかった。

生活排水の悪臭に顔をしかめながら、ひざの上に座っていた鼠を追い払った。足をかじられたりしたらたまらない。ポケットに擦り込んだ僅かな小銭とナイフが盗まれていないことを確認し、俺は起き上がった。大して高価じゃないが、寝ている間に掏すられていたりしたら困るのだ。このナイフには結構思い入れがある。

素足を冷たさが襲った。何日も風呂呂に入ってなくて頭がかゆかった。シラミの所為だろう。燃料をかけるとシラミは死ぬらしいが、昔目に入ると失明しかけた奴がいたので怖くてできない。

金に余裕がある日など無い。空腹を抱えながら、マンホールをこじ開け、外に出た。この場所を覚えておく必要は無い。またその辺で寝ればいいだけの話だ。

俺は街をぶらぶら歩いてカンとビンを探した。売ればちょっとした金になるのだ。

……一円三円の世界だけだ。

ゴミ箱を見つけて、俺は少し漁ってみただけだ、金属片で指を切っただけだった。

「いったっ！」

舐めときゃ治るだろうと思ったが、舐めたら腹を壊しそうなほど手が汚かったのでやめておいた。化膿したらどんまいだ。辺り一帯を捜してみたが、都合よくその辺にビンが捨ててあるわけも無く、結局無駄足に終わってしまった。他の奴らがもう拾って行ったのかもしれない。その辺にビンが落ちているかどうかは、俺たちストリ

「トチルドレンにとっては死活問題なのだ。

あきらめて俺はその後、靴磨きをさせてくれと数人の大人に頼んだが、にべも無く断られた。俺は一人ごちた。

「ついてねえな」

日は昇り昼ごろになり、空腹に負けて、有り金で屋台のホットドックのハーフサイズを買った。四日ぶりの食事だ。二本食っても足りないくらいだったけれど、生憎そんな金は無い。

ポンド食ってた昔に比べりやました。俺はそう思うことにした。

あつという間に食べ終わってしまい、そこで店をしばらく睨んでいた。

俺は目が悪いのと細いのと、もともと目つきが悪いのとで、睨むと喧嘩上等みたいな顔になるらしいのだ。(by 幼馴染 笑) もつともそんなんでサービスしてもらえるほど世の中甘くないのはわかってるんだけど。

そうしたら向こうから人影が、あれは……

「ひさびさじゃ〜ん!! 元気してた?」

「あ? ああ」

それは昔別れた幼馴染だった。

「ね、お腹すいてんの? また痩せたね」

「引き締まったといってくれ。ていうかお前もだろ?」

「いや、臨時収入があったから。ホットドック一個くらいなら買ったげるよ」

「お前……!」 また援交したのか。

「また……その……」

「別に金の出所なんかどうだっていいでしょ! 生きるためには食べなきゃならないんだから」

彼女が身体を売っているのには反対だが、この空腹には耐えられそうに無かった。

「……………」  
「いいわよ。空腹の辛さくらい知ってるもの」そういって彼女は出  
店まで走っていった。  
「あいつ……………」

\*

俺とあいつは家が隣だった。

あいつは母親に似て美人で、似なかったが俺の父親は男前だった。  
俺が四歳のとき引越してきてほどなく、俺の父親とあいつの母親  
は不倫したのだ。

事が露見するきっかけとなったのは、あいつの母親の妊娠だった。  
発覚したのはたしか、俺たちが八歳のとき。

家庭が崩壊した。

俺の父親は母親を捨て、あいつの母親は父親から逃げた……………駆け  
落ちしたのだろう。その後俺の母親は麻薬に、あいつの父親は酒に  
走り、俺たちに暴力をふるうようになった。食事など与えられない。  
家事をしなければならぬから学校に行く時間もない。罵詈雑言を  
浴びせられ、物を投げつけられ、八つ当たられた。

ヒステリックに怒鳴り散らす彼らと暮らすのは、もう限界だった。  
だから俺たちはこの身ひとつで逃げ出した。十一歳の時だった。

俺たちはふたりで毎日必死で生きた。生ゴミでもボンドでも鼠で  
も食った。腹壊すとか病気になるとか、そんなこと気にしていられ  
なかった。寒くて死にそうだったし、食い物がなくて餓死しそうだ  
った。服はあつという間にボロボロになり、盗んでくるしかなかつ  
た。

知り合った奴には暴力で生計を立てている奴もいた。あいつが絶  
対だめだって言ったから俺はそうはしなかったけど。それに、そう  
いう奴らはいずれ暴力で消される。

そしてそんなある日、あいつは急に俺の前から消えたのだ。『こ

れ以上一緒にいられない。』と、そう言っ

それは俺があいつに対して、女の子だからといって気を使っ  
たのをわかってたんだろ。

そして俺にそんな気使いをさせたくなかったんだと思う。あいつ  
は優しく、いつだって人のことを考えていたから。

俺はあいつが大好きだったし、今もそうだ。あいつもそう思っ  
てると思う。だから俺たちは別れたのだった。

いつだって心はひとつだった。いつだって二人でやってきた。い  
つだってお互いを思っていた。だからこそ。

別れた後、俺は靴磨き、空きビン売り、煙突掃除：要するに何で  
もやっていた。そしてあいつは、ストリップショーと援交で生計を  
立てていた。

俺はそれを知ったとき全力で止めた。あの華奢な体がどんなふう  
にいたぶられているのか、あの細い足を誰が撫でているのか。考え  
ただけで死にたくなかった。男達にそういう目で見られているなんて  
耐えられなかった。俺はあいつにだけはそんなことしてほしくな  
った。生きるためだなんて、そんなことをする理由にならなかった。  
だけど何を言っただってあいつはやめてはくれなかった。

俺はあいつを止められなかった自分が不甲斐なくて、嫌で、憎く  
てうざくて仕方なかった。一緒にいればこんなことにはならなかつ  
たはずなのに。そんな思いが頭を離れなかった。俺は生きるために  
手に入れたナイフを自分の腕に突き立てて、何度も切った。血がだ  
らだら流れたけれど、俺はやめなかった。

あいつは俺の血だらけの腕にすがりついて、そんな俺を必死に止  
めた。死んじゃうよ、やめてって、泣きながらそう言っていた。

あいつの優しさが痛いほどわかって、それがわかればわかるほど  
俺は悔しくなった。

何故あいつがこんな目に遭わなければならぬのか。クズな奴なんかいくらでもいるのに、どうしてあいつなのか。どうしてあいつは親に愛されることさえかなわなかったのか。どうして……どうして……

\*

「おまたせっ！」

満面の笑みで、自分も食いながらホットドックを差し出してきた。

「……わりぃ」

「いんだよ別にいい。ほら、食べてよっ！」

俺はホットドックを受け取って食べた。こいつはいつもそうなのだ。どんなときでも誰に対しても明るく、笑顔を絶やさない。

俺にはできない。

俺は食べ終わったところを見計らって話した。

「お前、まだ……援交してんのか」

「……そうだよ。だけどその話はもうしないでほしいって、言ったよね」

声が怒っているのがわかったが、俺はやめるわけにはいかなかった。

「……やめてほしいんだ。お前にそんなことしてほしくないんだよ」

「私に死ねって言うの？」

「違う！俺はただ、お前が金で男に抱かれるなんてそんなの……嫌なんだよ！」

俺は彼女を強く抱いた。

「なんでお前がそんなことしなきゃいけないんだよ！クソなのは俺たちの親で俺たちじゃねえのに！」

彼女の身体が強張っていた。

その身体が、彼女は一度だって愛されて、抱かれたことがなかつ

たことをあらわしていた。

「ごめん」彼女はそう言っただけだ。

「私のためを思ってるのはわかってる。だけど…もう誰も信じられないよ……」

彼女は俺の胸で声殺して泣いていた。下を向いて泣き顔を隠していた。

「泣いていいんだよ……我慢すんなよ」

向こうでゆっくりと日が沈んでいくのが見えた。

明日も食い物がなにかもしれない。こいつはまた援交しなきゃならない。寝床だってないかもしれない。ランチに遭うかもしれない。寒さに凍えて死ぬかもしれない。

どうしてこんなに不公平なんだろう。何でこんな不条理がまかり通っているんだろう。俺たちは十三で、まともに働くこともままならない。子供だというだけで、どんなに困っていても、まともな所に雇ってはもらえない。

一度泣いてしまったら止められなくなるから、俺は上を向いた。そうやってやり場のない思いを押し込んだ。

俺まで泣いてたまるかよ。

どうして俺たちの親はあんなになってしまったのか。いつか俺たちも俺たちの親のようになってしまふのだろうか。そんな親たちに育てられた子供は生きていけるのだろうか。どうしてこの国はこんなに貧しいのか。どうしてこんな目に遭わなければならないのか。

そして俺はどうして……愛されないことくらいわかっているのに、親のことを心の底から憎めないのか。あいつがいなかったらポンドなんて食う必要なかった。寒いところで練る必要なんて無かつ。こんなに辛い思いをすることは無かつた。彼女がこんな目に遭うこと

fly high

なんて無かった。それなのに。

そんな感情、あっても邪魔なだけなのに。

俺はどうして、家を出ないほうがよかったんじゃないかって、母親が悲しんでるって、そう思ってしまうのか。

そんなはずはないのに。

わかってるはずなのに。

## ロシア ストリートチルドレン（後書き）

こんな小説を書いておいて無責任な話ですが、私は募金活動とかは積極的にやるほうではありません。だけど少年兵やストリートチルドレンの子供たちの暮らし…それどころか存在すら知らない日本の子供は沢山います。

そういうことを考えると自分は超低い次元で悩んでるよなあなんて思います。生きてる意味があるんだろうかとかテストの点やばいんじゃないかとか悩んでる自分はそう考えるとかなり幸せなわけです。少なくとも明日生きていられるかを心配せずにこれまで生きてこれましたから。

そんなことを思いつつ日々過ごしています。

変なところ、誤字脱字、感想などありましたらお知らせいただけるとうれしいです（酷評でもOKです。参考にさせていただきます）  
ここまで読んでくださった皆様、本当に本当に、ありがとうございました

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0311e/>

---

fly high

2009年6月30日18時45分発行